紫禁城と世界：文化的交わり

五千年以上にわたり、中国文明は絶え間なく発展を続けてきました。それを形作ってきたのは、文化的な開放性とダイナミズムという長い伝統です。連綿と受け継がれてきたこの特質が、長い間中国の社会と文化の生命力を支えてきました。明代（1368～1644年）と清代（1644～1911年）は、それ以前の時代に確立された統治システムと道徳的系譜を受け継ぎました。両王朝は外交や交易を通じて幅広い地域やコミュニティと交わり、文化を超えた対話、交流、そして相互理解を促進したのです。明および清の皇宮であった紫禁城は、政治権力の中枢として機能しただけでなく、中国と広く外の世界とを結ぶ交流の舞台でもありました。その建築、工芸品、そして紡がれてきた物語には歴史の足跡が刻まれており、その歴史は、商品、技術、芸術、思想、文化の往来を伴う、五世紀以上にわたる異文化間の邂逅を証明しています。こうした数々の交流は、世界の文明における創造性や変革にも影響を及ぼしました。

本展は、香港故宮文化博物館と故宮博物院の共同開催であり、香港ジョッキークラブ慈善信託基金が単独で協賛しています。

交流のルート：マルコ・ポーロと鄭和

元（1271〜1368年）および明（1368〜1644年）の時代には、中国の陸路および海路の外交ルートは黄金期を迎えました。ヴェネツィアの商人マルコ・ポーロ（1254年頃〜1324年）が辿った陸上のシルクロードと、のちに明の外交使節である鄭和（1433年没）が航海した海のルートは、明および清の時代を通じて、中国と世界を結ぶ主要な交流の回廊であり続けました。元代には、諸外国へと続く陸路の往来が容易になり、マルコ・ポーロはシルクロードを経てユーラシア大陸を横断し、中国へと至りました。彼はその旅行記の中で、当時の大都（現在の北京）の繁栄ぶりを描写しています。この頃、西アジアからエナメル（七宝）の技法が中国に伝わりました。この技法が中国で取り入れられるにつれ、次第に中国の伝統的な装飾芸術の一部となっていきました。同様に、元代から明代初期にかけて、青花（染付）磁器の装飾に用いられたコバルトブルーの顔料が西アジアから輸入されました。この時代の中国陶磁器の形状や文様には、中国と西アジア、そして中央アジアとのダイナミックな交流が生き生きと反映されています。鄭和は1405年に全7回に及ぶ大航海の第一回目の航海に乗り出し、東南アジア、南アジア、アフリカにわたる30以上の国や地域を訪れました。彼の船団が携えた絹などの贈り物は異国の地で高く評価され、その航海により、中国の国際交流はかつてない水準まで拡大しました。

輸入された宝物：
明代の宮廷美術と世界の新しい知識

17世紀以降、宮廷にもたらされた海外の知識は大きな影響を与えました。明代（1368〜1644年）は、14世紀後半以降、政府により諸外国との民間貿易が制限されていました。しかし隆慶帝の時代（1567〜1572年）になると、福建省漳州の港である月港における対外貿易が正式に許可されました。これにより、南アジアや東南アジアから希少な原材料が安定して流入するようになり、16世紀後半から17世紀半ばにかけての中国の美術や物質文化は大いに豊かになりました。輸入された熱帯の広葉樹（堅木）で作られた家具は、まず江南地方で制作され、次第に宮廷へと広がり、のちの清代初期の宮廷では標準となりました。また、宮廷の装飾芸術や宝飾品に用いられたカワセミの羽は主に東南アジアから調達され、現代のスリランカやインド産のルビー、サファイア、トルマリン、現代のミャンマー産の翡翠といった宝石が、宮廷の装飾品や高級品の貴重な素材として使用されるようになりました。東南アジア産の香辛料もまた、重用されました。1601年、イエズス会士のマテオ・リッチ（1552〜1610年）が紫禁城に世界地図をもたらし、宮廷へ世界の地理や博物学を紹介しました。のちの清代宮廷で編纂された『百鳥図帖』や『百獣図帖』といった画集には、それら海外の珍しい生物がかつてないほど正確に記録されています。

東と西の出会い：
清代における芸術と科学の交流

清代の康熙帝（1662〜1722年）、雍正帝（1723〜1735年）、および乾隆帝（1736〜1795年）の時代、中国では、外の世界との対話が持続しただけでなく、工芸技術が大きく進展し、新たな科学技術の融合が進みました。ヨーロッパの宣教師たちは、数学、天文学、地理学などの新たな学問を宮廷に導入し、それにより中国の絵画、画琺瑯、ガラス製造、その他の美術工芸におけるヨーロッパの技術の革新的な応用が促進されました。康熙帝はヨーロッパの科学に強い関心を示し、ヨーロッパの水準に匹敵する工芸品を作り出すという野心のもと、ガラス製造や琺瑯技法の開発を積極的に支援しました。続く雍正帝は、日本の漆器に深い関心を寄せ、琉球からの朝貢品であった日本刀を参考に、宮廷の近衛兵のための武器を制作させました。そして乾隆帝の治世になると、多くの分野における宮廷美術の制作が全盛期を迎え、中国と海外の伝統を融合させたことで、技術的な成熟の極みに達しました。

皇帝の南の蔵：広東海関と世界

18世紀、広東海関は中国の対外貿易の主要な拠点として台頭しました。1685年、清朝は広東省、福建省、浙江省、江蘇省に海関（税関）を設置しました。1757年、中国南部の広東（現在の広州）が、外国商人に開かれた唯一の港に指定されました。広東で政府の認可を受けた商人団である十三行は、中国と諸外国との間のすべての貿易における法的独占権を握っていました。広東海関の監督者は内務府の官僚の中から選ばれたため、広東海関は「皇帝の南の蔵」として知られていました。広東海関の官僚らは対外貿易を監督し、絹、茶、磁器などの中国からの輸出品に関税を課し、国家の財政に極めて重要な財源をもたらしました。十三行の商人たちはまた、皇帝のために、紫檀の家具、嗅ぎタバコ、時計、科学機器、鏡などの海外の珍しい品々や目新しい貴重品を収集しました。

歴史を礎に、未来を構築

明と清の時代、紫禁城と外の世界との間の文化交流は、陸路のシルクロードと拡大する海上貿易ルートの双方を通じて大いに繁栄しました。これらの交流は、外交から芸術、技術、思想、文化的慣行において、文明間の対話を映し出すものでした。元代の有線七宝（クロワゾネ・エナメル）、清代の宮廷におけるヨーロッパ製時計、さらに鄭和の歴史的な大航海や広東海関を介して管理された輸出貿易など、明と清の宮廷は遠い異国からの影響を吸収した一方で、中国の絹、磁器、茶などの貴重な商品を広く世界に輸出していました。文明は、交流と相互の学び合いを通じてよりより豊かで多彩になり、人類の進歩や世界の平和と発展の重要な原動力となります。本展は、紫禁城の歴史を通して何世紀にもわたる世界との繋がりを見つめることにより、世界の様々な文明が互いへの理解と包摂性を深め、共に繁栄する道への歩みを進め、協力して人類の明るい未来を形成して行くことを願うものとなっています。